

## 第5章 千葉大学キャンパスの整備と再配置

### 第1節 キャンパスマスタープラン

#### 第1項 地区マスタープランと計画推進室の発足

千葉大学のキャンパスマスタープランの始まりは、1994（平成6）年9月22日評議会決定された「西千葉地区キャンパス整備計画大綱」に遡ることができる。西千葉地区キャンパスを総合的・統一的に再整備することを目的とし、施設の老朽化、非効率化、及びキャンパス全体の建て詰まり状況の解消、教育改革や予想される部局の新設・再配置等の施設整備への対応、将来の学問の質的・量的発展と機能的な教育研究活動の展開を可能にする良好な環境の創出、という視点からマスタープランが策定された。

1995（平成7）年6月には、西千葉地区と亥鼻地区のマスタープラン作成を目的として工学部内の作業室として「計画推進室」が設けられた。服部岑生室長（工学部教授、当時）と2名の室員のもとで、東京大学生産技術研究所西千葉実験所敷地を園芸学部移転の場所として利用する計画（中間報告1997年9月）を含む西千葉地区マスタープランが作成され、また、薬学部の西千葉キャンパスからの移転を見据えて亥鼻地区マスタープランが作成された。

1998（平成10）年に、その後、室長となる上野武助教授（当時）および岸本達也助手（当時）が専任教員として着任した。松戸からの園芸学部移転が見送られたため、西千葉キャンパスマスタープランの作成は一時見送られることとなったが、自然科学系総合研究棟2及び工学系総合研究棟1（2002年）など施設高層化の計画ならびに、附属図書館増築将来構想検討、医学部附属病院新病棟検討が行われた。さらに、全学的な施設マネジメントの必要性から、施設有効利用データベースの構築が行われ、Net-FMのシステムが2001（平成13）年に完成し、現在でも活用されている。

しかし、既存建物の耐震改修を前提とした文部科学省の施設整備方針（第1次・第2次緊急整備5カ年計画、2001年、2006年）が実施されたこともあり、全面建替え

を前提にしたマスタープランは実現性が乏しくなっていた。また、亥鼻・松戸・柏の葉の3キャンパスについては、全学で決定されたマスタープランとしての中長期計画は存在していなかった。

## 第2項 キャンパスフレームワークプランと キャンパス整備企画室の発足

2004（平成16）年の国立大学法人化を機に、こうした中長期的なマスタープランを全キャンパスに展開し、加えて、施設マネジメント、環境マネジメントを遂行するため、同年6月に、計画推進室をキャンパス整備企画室に改組し、服部岑生初代室長（工学部教授、兼務）、上野武准教授（専任）、鈴木雅之助教（専任）のもと、各地区や専門分野の兼務教員と、施設環境部の部課長を配置する体制となった。このもとで、西千葉キャンパスの工学部改修に伴う研究室移転計画、亥鼻キャンパスの医薬総合研究棟基本計画、薬学部移転問題再検討、柏農場再整備計画が行われた。

こうした状況を踏まえ、各キャンパスの今後の整備方針、ゾーニング、交通計画をまとめた千葉大学キャンパス・フレームワークプランが、上野武2代目室長（2006年～室長、2008年～教授、専任）のもとで作成され、2007（平成19）年3月に部局長連絡会の了承を得た。

またこの間に、西千葉キャンパスでは、附属図書館の改修・増築によるアカデミック・リンク・センターが整備された（2012年度グッドデザイン賞、千葉市都市文化賞）。また、生協ライフセンターを含む総合学生支援センターの改修が完了した（2012年）。亥鼻キャンパスでは、薬学部の移転が完了した（2011年9月）。松戸キャンパスでは、園芸学部D号棟が改修され（2012年）、柏の葉キャンパスでは、農水省・経産省補助金による植物工場が建設された（2011年）。

## 第3項 キャンパスマスタープラン2012および2017

2010（平成22）年3月に、文部科学省は国立大学法人が個性や特色を活かした魅力あるキャンパスを実現していく必要があるとして、キャンパス計画の基本的な考え方や考慮すべき視点等をまとめた「戦略的キャンパスマスタープランづくりの手引き」を策定し、各国立大学法人に対してキャンパスマスタープランの作成を求めた。千葉大学では、その作成のために同年にキャンパスマスタープラン検討WGを発足さ

図1-5-1-1 2012年度版表紙



せ、約1年半に及ぶ検討作業、学内の学生・教職員の意見聴取等を経て、2012（平成24）年3月に、「千葉大学キャンパスマスタープラン2012」が完成し、教育研究評議会および役員会の承認を得て公表した（図1-5-1-1）。

千葉大学のキャンパスマスタープランの特徴は、以下の通りである。

- ・千葉大学らしさを生かした「日本一のキャンパス」という高い目標を設定した点
- ・大学全体の将来戦略に合ったフレームワーク（骨格）を示す計画案を作成している点
- ・全学の教員による検討WG・各地区の検討部会によって十分に議論して作成された点
- ・キャンパスの課題や問題点を徹底的に洗い出し、現状を正確に把握した点
- ・教育研究評議会および役員会の承認を得た公式なマスタープランである点

千葉大学のキャンパスマスタープランは、アカデミックプラン（千葉大学憲章、千葉大学行動規範、環境方針）や、中期目標・中期計画に掲げられた基本理念の実践を支えるものである。大きく、本編と資料編で構成され、本編は、目標と計画ビジョン、キャンパスの基本整備方針、キャンパスの現状と課題、キャンパス・フレームワークの4章で構成され、キャンパスが進むべき道を示している。また、資料編では、キャンパスごとに25項目のチェック項目で現状と課題を整理している。

キャンパスの基本整備方針は、「3つのS」として表されており、「1. Campus Strategy：特色を活かす戦略的なキャンパスの実現」は、各キャンパスごとに組み立てられ、「2. Campus Sustainability：美しい持続可能なキャンパスの実現」及び「3. Campus Safety：安全・安心なキャンパスの実現」は、キャンパスの土台として各キャンパスに共通するものとなっている（図1-5-1-2）。キャンパスマスタープランは、20年程度（中期計画3期分程度の中長期）の将来を見据え、中期計画に応じて改

図1-5-1-2 基本整備方針の構成



訂するものとしている。次の2017年度版は、2017（平成29）年7月に公表され、こうした基本整備方針やフレームワークが踏襲されている。

この間に、西千葉キャンパスでは、工学系総合研究棟2が完成した（2014年）。また、キャンパスマスタープラン2012で、亥鼻キャンパスにおける安全・安心なキャンパスの実現の中で位置付けられていた、戦後を代表するモダニズム建築の医学部記念講堂（1964（昭和39）年完成の寄付建物）は、耐震改修が完了しBELCA賞と呼ばれる保全・改修に対する権威ある賞を受賞している（2016年）。

#### 第4項 キャンパスマスタープラン2022

キャンパスマスタープラン2017の策定後、キャンパスを取り巻く状況や社会情勢は大きく変化し、検討すべき課題が顕在化した。

西千葉キャンパスでは、東京大学生産技術研究所西千葉実験所の移転が完了し、それに伴う敷地の一部編入によるキャンパスの拡大（2022年度）や、老朽化が進行する工学部再開発計画、亥鼻キャンパスでは、附属病院新中央診療棟（2020年）及び医学系総合研究棟（2021年）が竣工し、それに伴う旧医学部本館の保存または再生の検討、松戸キャンパスでは、附属図書館松戸分館アカデミック・リンクセンター及び緑のテラスが完成し（2021年度グッドデザイン賞）、一帯の共同利用ゾーンの拡充や、緑風会館の老朽改善、急傾斜地対策、柏の葉キャンパスでは、グリーンフィールド（学園の道）の整備や、キャン

パス南側の定期借地権による英国ラグビー校の開校（2023年秋予定）、さらに、5番目のキャンパスの墨田サテライトキャンパスが、旧中小企業センターを墨田区が大規模改修し、そこに賃借入居する方式で開設された（2021年4月）。（図1-5-1-3）

こうした学内の状況とともに社会情勢においては、持続可能な開発目標（SDGs）に向けた

図1-5-1-3 2022年度の4+1キャンパスの様子

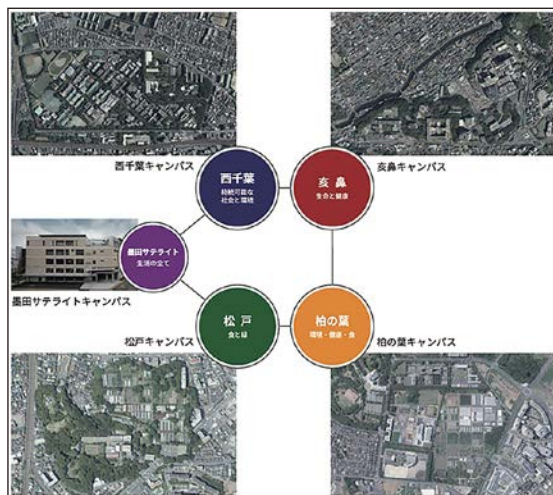
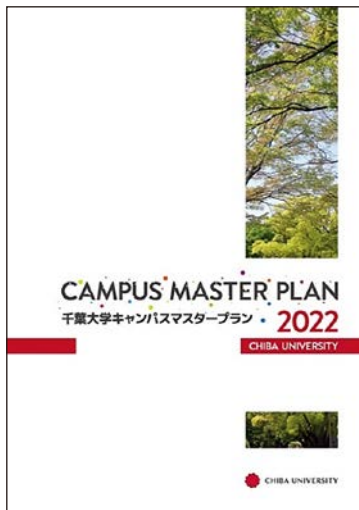


図1-5-1-4 2022年度版表紙



省エネの推進やダイバーシティに配慮したサステイナブルなキャンパスの構築、また、施設の長寿命化とともに、社会の革新に対応した産学連携や地域連携の推進によるイノベーティブなキャンパスの構築、さらに、2020年からの新型コロナウイルス感染症の世界的流行によるオンライン授業やハイブリッド型の教育をふまえたポストコロナ時代のキャンパス整備等が求められるようになった。

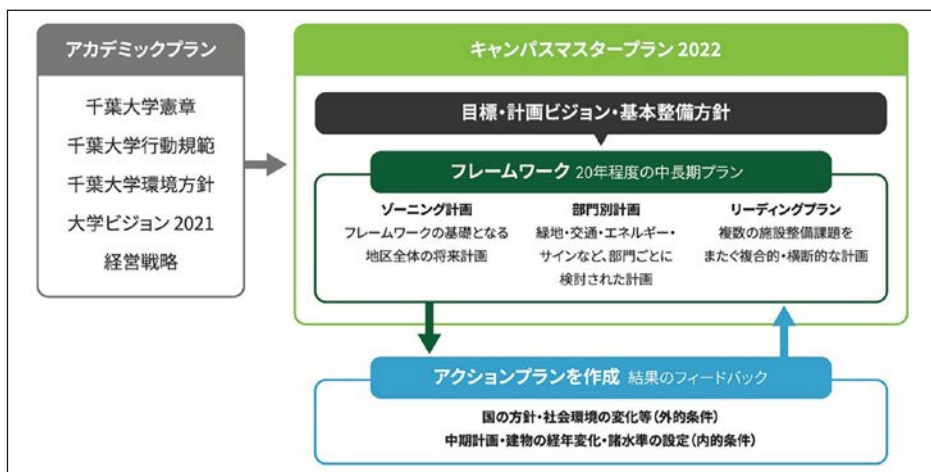
キャンパスマスタープラン2022は、こうした点をふまえて、2022年度から始まる第4期中期目標・計画を受けて部分改訂する予定を1年繰り上げて、安森亮雄3代目室長（2021年～、工

学研究院教授、兼務）及び武田史朗副室長（2022年～、園芸学研究院教授、兼務）のもとで策定された（図1-5-1-4）。その特徴を以下に述べる。

### (1) キャンパスマスタープランの構成とリーディングプランの導入

千葉大学のキャンパスマスタープランは、前述したように、アカデミックプランの実践を支え、中長期的な大学経営・運営に関わる施設と環境整備計画を意思決定するために必要な戦略的プログラムであり、加えて、計画の柔軟性と段階的な整備を反

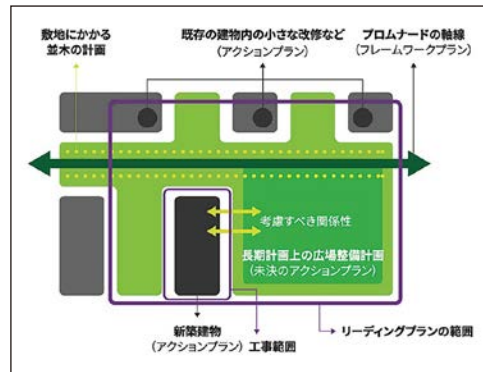
図1-5-1-5 キャンパスマスタープランの構成





映させた中期的なアクションプランを策定し、これらの相補的な関係の中でキャンパス空間を形づくるために構成されている(図1-5-1-5)。こうしたフレームワークを推進し、アクションプランへと繋げるために、2022年度版では、従来のゾーニング計画と部門別計画に加えて、「リーディングプラン」を設定した。複数の施設整備課題をまたぐ複合的、横断的な整備計画によって、オープンスペースなどの複数の施設整備の影響を受けるキャンパスの重要な部分を含めて設定することで、従来実現しにくかったキャンパスの顔づくりやアイデンティティとなる景観の形成を図るものである(図1-5-1-6)。

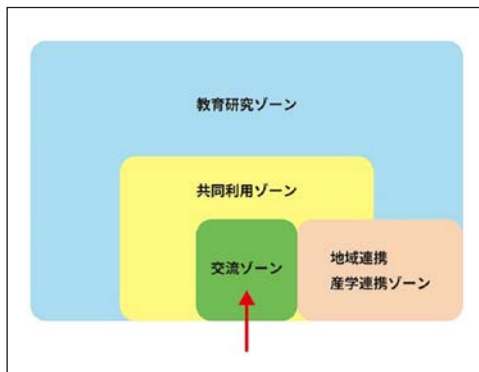
図1-5-1-6 リーディングプランの考え方



## (2) ゾーニング計画と地域連携・産学連携ゾーンの重視

フレームワークの基本をなすゾーニング計画は、2012年度版の当初から、正門などのアプローチの直近にある交流ゾーン、それを取り巻く形でキャンパスの利便性を高める共同利用ゾーン、各学部からそれらへのアクセスを容易にし共同利用ゾーンを取り巻く形で教育研究ゾーンという、3つのゾーンによって現況を把握し、将来像を定めてきた。2022年度版では、これに加えて、近年のイノベーティブな教育研究や社会貢献を背景に、「地域連携・産学連携ゾーン」を、門や交流ゾーン、共同利用ゾーンに近接する形で積極的に整備することにした(図1-5-1-7)。各キャンパスのゾーニング計画は、この基本形のもとで、ゾーンの効率化や再編を計画するものとなっている(図1-5-1-8)。西千葉キャンパスにおいて、2022年度に一部編入される東京大学生産技術研究所の跡地は、従来、キャンパス東側に点在していた産学連携施設を含めて、産官学の連携や、学際的研究、隣接する民間再開発地区との地域連携等を可能とするゾーンとして、今後整備が検討される予定である。

図1-5-1-7 ゾーニングの基本形



この基本形のもとで、ゾーンの効率化や再編を計画するものとなっている(図1-5-1-8)。西千葉キャンパスにおいて、2022年度に一部編入される東京大学生産技術研究所の跡地は、従来、キャンパス東側に点在していた産学連携施設を含めて、産官学の連携や、学際的研究、隣接する民間再開発地区との地域連携等を可能とするゾーンとして、今後整備が検討される予定である。

図1-5-1-8 ゾーニングの現状と将来の展望

	西千葉キャンパス	亥鼻キャンパス	松戸キャンパス	柏の葉キャンパス
現状ゾーニング				
将来ゾーニング				
整備方針	門から近いところにある共同利用ゾーンをできるだけ交流ゾーン付近に配置できるように積極的に整備する。 単大を緑地の購入地区を含めた地域連携・産学連携ゾーンを充実させるとともに、ゾーンをつなぐ交流ゾーンを形成する。	東西に広がる教育研究ゾーンをキャンパス中央にまとめることを検討する。 交流ゾーンの機能性を強化するとともに、旧医学部本館を含む地域連携・産学連携ゾーンを充実させる。	城北門を正門とするゾーニングとし、交流ゾーンの整備性高を図るとともに、共同利用ゾーン、地域連携・産学連携ゾーンを含めた連携を検討する。	正門から西門へつながるゾーンを交流ゾーンの整備性高を図るとともに、キャンパス南側を国際連携ゾーンとして活用するとともに、教育研究ゾーンと共同利用ゾーンを北側へ移動して整備する。

### (3) 基本整備方針の改訂と4+1キャンパス

キャンパスの基本整備方針は、前述したように、「戦略的であること」「美しく持続可能であること」「安全・安心であること」の3点であるが、初版から10年が経過した2022年度版では、この間の社会変革と、2021（令和3）年度からの新たな大学ビジョン「世界に冠たる千葉大学へ」における研究・教育・大学経営・社会貢献の方向性を反映するものとした（図1-5-1-9）。すなわち、戦略の先にある社会や産業のイノベーションを目指して、「1. Campus Strategy：特色を活かす戦略的でイノベーションなキャンパスの実現」、また、SDGsやカーボンニュートラルなどの地球環境への配慮と、多様な人々を受容するダイバーシティを目指して「2. Campus Sustainability：美しく持続可能で多様性を受容するキャンパスの実現」、さらに、近

図1-5-1-9 基本整備方針の特長と各キャンパスの戦略



年の激甚化する自然災害とその後の回復力が求められていることを反映して「3. Campus Safety：安全・安心・レジリエントなキャンパスの実現」とした。

また、これらの基本整備方針は、文部科学大臣が2021年3月に決定した、第5次国立大学法人等施設整備5か年計画における「あらゆる分野、あらゆる場面で、あらゆるプレイヤーが共創できるイノベーション・コモンズ（共創拠点）の実現を目指す」という基本的な考え方に合致するものとなっている。

## 第2節 柏の葉キャンパス

### 第1項 園芸学部附属農場柏農場の開設

千葉大学は1987年、松戸地区の園芸学部附属農場市後尻地区約2.2haの用地の代替として、柏市十余二（現在の柏の葉6-2-1）の柏通信所跡地に約25haの農場用地を取得した。当初、約30haで調整が進んでいたが、約5haを県立高校用地として使用してもらうこととなり、このため敷地形状が変更された。これが千葉大学柏の葉キャンパス（名称使用2007年以降）の開設になる。園芸学部は1991年に附属農場校内農場を廃止して柏市に移転させ、名称を附属農場柏農場とし、附属農場事務部をおいた。1992年、柏農場の拡充整備計画は完了した。この時期の活動については、『千葉大学五十年史』の記載を参照されたい。この当時の航空写真（写真1-5-2-1および写真1-5-2-2）を示した。東側（写真の上側）にはゴルフ場が広がっている。



写真1-5-2-1 1989年のキャンパス周辺



写真1-5-2-2 1992年の柏の葉キャンパス

出典：国土地理院ウェブサイト (<https://mapps.gsi.go.jp/maplibSearch.do#1>)